

東島根中学校長雑感

足立区立東島根中学校

令和7年6月5日 令和7年度 第4号

ハヤネハヤオキ

校長 大瀧 訓久

全校朝礼で、運動会という行事を通して「企画力」「運営力」を身に付けてもらいたいと生徒たちに話をしました。高校での体育祭や学園祭は生徒たちで企画・運営していきます。有名なお正月の箱根駅伝も大学生たちが中心となって運営しています。この経験が社会に出た時にとても役立つのです。最終的には自分の人生に・・・自分の人生は自分自身で企画・運営していくものです。

予行のドミノブリッジの競技の時、第一種目の「うつぶせ」で1組の上級生が全体に大きな声で「早寝早起きだよ!」「早寝早起き!」「ハヤネハヤオキ!」と声をかけていました。今までにない掛け声でした。分かりやすくナイスな掛け声。何事も成功への第一歩は、「早寝早起き」「朝ごはん」です。生徒たちの企画力・運営力に改めて感動しました。

もはや伝統競技種目にもなった『ドミノブリッジ』、初体験の1年生にとってはとてもハードな競技だったかもしれませんが、コロナ禍などで低下した「体力・忍耐力・協調性」の強化にもなり、本校の教育目標である『思いやる』『やり通す』にも繋がるはずです。運動会だけではなく、学生時代に、勝っても負けても涙を流せる**本気の体験**を沢山経験してもらいたいです。本気の体験が、人を一廻りも二廻りも強く逞(たくま)しくしてくれるのです。

努力して結果が出ると、自信になる。

努力せず結果が出ると、傲り(おごり)となる。

努力せず結果も出ないと、後悔が残る。

努力して結果が出ないとしても、経験が残る。

努力した者が、必ず成功するとは限らない。

しかし、成功した者は、必ず努力していた。

東島根中学校は、これからも「一生懸命が感動を生む」「努力することの大切さ」「強い思いが形になる」ことをしっかりと生徒たちに体験・伝えていきたいと思います。

たくさんの感動をくれた生徒たちに感謝するとともに、練習や音響等でご迷惑をお掛けした地域の皆様、子供たちを温かく励ましてくださった保護者の皆様、当日の係に忙しく働いてくださったPTAの皆様に厚く御礼申し上げ、第65回運動会成功のご報告とさせていただきます。

今後の予定

6月 9日(月) 全校朝礼、学校公開始

10日(火) 専門委員会

11日(水) 身体体力測定、区中研の日

13日(金) 中央議会、漢字検定

14日(土) **土曜授業**、3年:修学旅行説明会

学校説明会 11:00~、学校公開始

花壇ボランティア 12:00~13:00

16日(月) 生徒集会

18日(水) 小中連携研修(東栗原小学校)

19日(木) **前期中間考査①(国・数・英)** **〈給食なし〉**

20日(金) **前期中間考査②(理・社)** **〈給食なし〉**

避難訓練

23日(月) 3年:実力テスト

24日(火) 専門委員会(7月分)

27日(金) 中央議会

30日(月) 生徒集会

7月 2日(水) 小中連携研修(授業・東栗原小学校)

4日(金) **小6中学校体験**

正々堂々 ～長嶋茂雄氏を偲ぶ～

元読売ジャイアンツ（巨人）の野球選手で「ミスタープロ野球」と呼ばれていた長嶋茂雄氏が6月3日にお亡くなりになった。長嶋茂雄と言っても皆さんは良く知らないと思いますが、タレントの長嶋一茂氏の父親と言えはわかるかもしれません。最近の警備会社のCMで投手・大谷と対戦していたバッターである。巨人に入団した1958年（昭和33）の1年目に本塁打王と打点王の二冠（打率は2位・もう少しで三冠王）を獲得し堂々と新人王に選ばれた。翌年には、天覧試合（**天皇が観覧する試合**）でサヨナラ本塁打を打つなど勝負強い選手として国民から絶大な人気があった選手である。しかし、残念ながら1961年（昭和36）生まれの私は、躍動感あふれる若いころの長嶋選手の活躍は観ることができなかった。

私が小学校に通っていたころの出来事を紹介する。1968年（昭和43）9月18日、プロ野球のシーズン終盤、セントラルリーグは巨人と阪神が熾烈な首位争いをしていた。甲子園球場での阪神・巨人の3連戦、江夏 豊、村山 実両投手が2試合連続の完封勝ちで首位巨人に5厘差まで迫った阪神は、ジーン・バッキー投手で首位奪取を図る。4回表二死二塁、巨人3番の王 貞治選手に対して、バッキーの一球目は王の頭の上に、二球目は腰を「く」の字にして避けるほど内角へ厳しいボールが来た。第1打席で死球を受けていた上に、危険なボールが立て続けに来たことで、王も頭に血が上り、左手にバットを持ったまま、つかつかとマウンドのバッキーに詰め寄る。その時、巨人の荒川 博打撃コーチが飛び出し、バッキーに襲いかかった。バッキーの右足を蹴る荒川コーチに、気短な助っ人投手が右ストレートで応戦。その後は、両軍入り乱れての取っ組み合いになった。荒川コーチは4針を縫う大けが、バッキー投手も右手親指を骨折し、2人とも退場処分になる。約20分の中断後、バッキーに代わり左腕の榎藤正利投手がリリーフに立った。カウント2-0から2球投げ、3-1からの3球目はカーブがすっぽ抜け、王の右側頭部に投球が直撃し、王は左打席で倒れたまま動かない。両軍ナインは今度はホームベース付近でつかみ合いになった。ようやく静まったのは、王が担架に乗せられて退場したところから。流血と乱闘の首位攻防戦に観客も興奮し、スタンドでは互いのファン同士の小競り合いも頻発するさま。野球どころの雰囲気ではなくなっていた。異様な空気が漂う中で、乱闘の場から一人離れバットをしっかりと握っていた4番・長嶋茂雄選手が険しい目つきで打席に入った。カウント2-2からの5球目、長嶋のバットが一閃すると、打球は左翼席に飛び込む35号3点本塁打。この一撃で巨人はこの試合に大勝し、勢いに乗った巨人は最終的には2位阪神に5ゲームの差をつけて優勝する。また、この長嶋の本塁打は、異常な雰囲気の中でグラウンドは乱闘の場ではなく、野球で決着をつける場ということを示した価値ある一発だった。

その当時の私の周りの少年たちは皆長嶋選手が好きでした。憧れでした。ヒーローでした。少年野球のユニフォームの背番号は長嶋選手と同じ「3」番の取り合いでした。私も心の中では「3」番を付けたかったけれど、野球がうまくなかった私（大瀧）はその当時巨人に瀧 安治という選手がいたので、瀧の「12」番を付けました。でも心の中は長嶋選手でした。

最近、人の命を軽んじる事件が多く報道され、心が痛みます。また、相手の感情を逆なでする行為や大衆の意見を誘導するようなメディア報道も時々耳に入り、心配になります。感情的になって「やられたらやりかえす」では解決できない事が多いです。逆に、手法を間違えると「負の連鎖」を生むことにもなります。皆さんは、これからの人生で「嫌なこと」「辛いこと」「悔しいこと」があっても、決して感情的にはならず、正々堂々と立ち向かう『カッコいい人』になってください。